

小規模校のメリット・デメリットについて

平成 27 年度文部科学省の「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き」には小規模校のメリットとデメリットが次のように記載されています。

<小規模校のメリット>

- ① 一人一人の学習状況や学習内容の定着状況を的確に把握でき、補充指導や個別指導を含めたきめ細かな指導が行いやすい
- ② 意見や感想を発表できる機会が多くなる
- ③ 様々な活動において、一人一人がリーダーを務める機会がおおくなる
- ④ 複式学級においては、教師が複数の学年間を行き来する間、児童生徒が相互に学び合う活動を充実させることができる
- ⑤ 運動場や体育館、特別教室などが余裕をもってつかえる
- ⑥ 教材・教具など一人一人に行き渡らせやすい。例えば、ICT機器や高価な機材でも比較的少ない支出で全員分の整備が可能である
- ⑦ 異年齢の学習活動を取り組みやすい、体験的な学習や校外学習を機動的に行うことができる
- ⑧ 地域の協力が得られやすいため、郷土の教育資源を最大限に生かした活動が展開しやすい
- ⑨ 児童生徒の家庭の状況、地域の教育環境などが把握しやすいため、保護者や地域と連携した効果的な生徒指導ができる

<小規模校のデメリット>

- ① クラス替えが全部又は一部の学年でできない
- ② クラス同士が切磋琢磨する教育活動ができない
- ③ 加配なしには、習熟度別学習などクラスの枠を超えた多様な指導形態がとりにくい
- ④ クラブ活動や部活動の種類が限定される
- ⑤ 運動会・文化祭・遠足・修学旅行等の集団活動・行事の教育的効果が下がる
- ⑥ 男女比の偏りが生じやすい
- ⑦ 上級生・下級生間のコミュニケーションが少なくなる、学習や進路選択の模範となる先輩の数が少なくなる
- ⑧ 体育科の球技や音楽科の合唱・合奏のような集団学習の実施に制約が生じる
- ⑨ 班活動やグループ分けに制約が生じる
- ⑩ 協働的な学習で取り上げる課題に制約が生じる
- ⑪ 教科等が得意な子供の考えにクラス全体が引っ張られがちとなる
- ⑫ 生徒指導上課題がある子どもの問題行動にクラス全体が大きく影響をうける
- ⑬ 児童生徒から多様な発言が引き出しにくく、授業展開に制約が生じる

⑭ 教員と児童生徒との心理的な距離が近くなりすぎる

山県市内の小学校学校規模について

第 1 回の適正規模検討委員会を受けて、山県市内の小学校長に、現在の学校規模についてのアンケートをとりました。その結果が次の通りです。

【学校が2学級の小学校】

○高富小学校(児童数…325人 学級数…12学級+特別支援学級 3学級 教職員数…23人)

○富岡小学校(児童数…312人 学級数…12学級+特別支援学級 2学級 教職員数…23人)

教職員数は非常勤講師を除く県費の教職員数

1 現在の学校規模(児童生徒数や学級数)について

①メリット

- ・多様な学習形態(学級全体・各種グループ・個人等)が可能である。
- ・グループ替え・クラス替えによって多様な人間関係が生まれる可能性がある。
- ・体育や休み時間の遊びで集団活動が可能である。
- ・年度ごとにクラス替えによる生活環境の変化を与えることができる。
- ・多様な価値観を知ることができるとともに、互いに競い合い、高めあうことができる。
- ・協同的な学びを行いやすく、考えを深めることが容易である。

②デメリット

- ・一人一人に、指導支援や見届けが行き届かないことがある。
- ・児童数が多いため成績処理等の事務処理量が多い。
- ・個別で活動することが望ましい場合に、道具の不備や場所が不足してできないことがある。

2 現在の教職員数について

①メリット

- ・教材研究・研修・主題研究・プロジェクト・力仕事などを協働で行うことができる。
- ・それぞれの得手不得手が、集団としてカバーしたり成長し合えたりする。
- ・専門教科に幅があり、さまざまな学びを子どもたちに提供することができる。
- ・年齢層、性別、経歴等も豊かで、子どもたちに対して多様な支援を与えることができる。
- ・教職員同士の関わり合いや学びあいも多く、指導力の向上等、職能開発に有効である。
- ・緊急時にも対応が瞬時にでき、子どもたちの生活に支障をきたすことがない人数である。

②デメリット

- ・共通理解が徹底しないことがある。

【学年が単学級の学校】

- 梅原小学校(児童数…64人 学級数…6学級 教職員数…11人)
 - 桜尾小学校(児童数…75人 学級数…6学級+特別支援学級1学級 教職員数…12人)
 - 伊自良南小学校(児童数…99人 学級数…6学級+特別支援学級1学級 教職員数13人)
 - 美山小学校(児童数…177人 学級数…6学級+特別支援学級2学級 教職員数15人)
- 教職員数は非常勤講師を除く県費の教職員数

1 現在の学校規模(児童生徒数や学級数)について

①メリット

- ・修学旅行、社会見学等校外学習や緊急時対応に機動性、柔軟性がある
- ・児童一人一人の学習・生活面の様子を丁寧に見届けをする時間が十分に確保できる。
- ・固定化された人間関係内での対応力(折り合いをつける力)習得の経験機会の多さ
- ・一人の児童あたりの係活動等の役割が多くあるため、児童が活躍する場面が多くある。
- ・空間的余裕の確保が容易である
- ・地域連携による各種体験活動の個別体験機会が多く得られやすく、郷土愛を育みやすい。
- ・学校の教育目標の具現に向けた教育活動を児童の実態に応じてフレキシブルに行うことができる。
- ・教職員の目が児童生徒一人ひとりに行き渡り、きめ細かな指導ができる。
- ・異学年交流を重視した教育活動を進めやすく、全校児童の交流が深まりやすい。
- ・成績処理や出席簿等の事務仕事の負担が少ない。
- ・授業における話し合い・意見交流、学級活動における話し合い活動が適切な人数で行える。

②デメリット

- ・固定化、序列化された人間関係や相互評価からの脱却の困難な場合がある。
- ・同学年における切磋琢磨、磨き合いの場の設定が困難な時がある。
- ・バス代金、アルバム代金等、一人あたり単価の高くなる
- ・集団規模が小さいため、体育や音楽での学習活動が制限されてしまうことがある。
- ・教師の目が届きすぎて、困っていると支援が入るため、自分の力で何とかしなくてよくなる。
- ・委員会活動・クラブ活動等の種類を減少しなくてはならない状況がある。

2 現在の教職員数について

①メリット

- ・教職員の意思疎通が容易であるため、緊急時対応における機動性、柔軟性がある。
- ・校内の会議の開催数を減らしやすい。
- ・全教職員で全児童の指導・支援ができ、その見届けもできる。

②デメリット

- ・1人の教職員が複数の校務分掌担当するため負担が大きい。
- ・同時多発的な緊急時対応の際の人員不足感がある。
- ・1人学年担当のため同学年内での業務分担ができない。
- ・学年を一人で経営することになり、指導計画、教材研究等、個人作業で行うことが多い。
- ・教職員の数が限られていることから、教職員間で学び合う機会が少なくなる。
- ・出張等で学級担任が2人いないと、授業の補充のための人員が配置できない。

・大勢の異動があると、学校のこと、地域のことの引継ぎがうまくできなくなる。

【複式学級のある学校】

○大桑小学校(児童数…42人 学級数…4学級+特別支援学級1学級 教職員数…10人)

○伊自良北小学校(児童数…29人 学級数…4学級 教職員数…9人)

○いわ桜小学校(児童数…25人 学級数…3学級 教職員数…7人)

教職員数は非常勤講師を除く県費の教職員数

1 現在の学校規模(児童生徒数や学級数)について

①メリット

- ・一人一人の児童に目が行き届くため、学習や生活で、困り感のある児童が把握しやすく指導しやすい。
- ・全児童を全職員で指導することができる。
- ・保護者や地域の方との結びつきが強い。
- ・少人数なのでコロナ禍であっても、行事の変更などに対応しやすい。
- ・地域之力(人材、資源など)を活用した学校運営がしやすい。
- ・児童同士、学年を隔てて顔や名前を知っており、異学年での活動が行いやすい。
- ・学校行事、学習指導等ですべてのことに小回りが利き、柔軟かつ迅速に活動できる。
- ・理科等など一人一実験一実践が可能である。

②デメリット

- ・クラス替えがないので、固定化された人間関係が続く。
- ・児童間の競争心が乏しい
- ・教員一人あたりの指導人数が少ないので、手をかけすぎることがある。
- ・登下校で一人になることがあると、安全上の不安がある。
- ・体育の授業や音楽の合奏・合唱など、ある程度の人数が必要なものを実施する場合に様々な制限が出てくる。
- ・少人数の中では力が発揮できる児童が、中学校に進学して大人数になると気おくれして力が発揮できないことがある。

2 現在の教職員数について

①メリット

- ・意思疎通が容易である。

②デメリット

- ・教職員の複数の出張が重なると補充が不足する場合がある。
- ・教務主任が学級担任も兼ねているので、教務主任の負担感が大きい。
- ・一人の教職員が複数の校務分掌を担当するため、負担が大きい場合がある。。
- ・小学校高学年教科担任制のためには、専門的な授業を指導できる教員が少ない。
- ・小学校外国語科、外国語活動、プログラミングなど新指導要領に対応した授業を指導できる教員が必ずしも存在しない。
- ・教職員が少ないので、複式学級を編制して教育活動を展開しなければならない。
- ・ぎりぎりの人数で運営をしており、有事の際、人手が足りないことがある。
- ・複式学級の担当教員は、幾つかの教科で二学年の教科の準備が必要となり負担が大きい。